

《12月例会報告》

認識という意識化

何気ない日常の

中にある数多の認識を

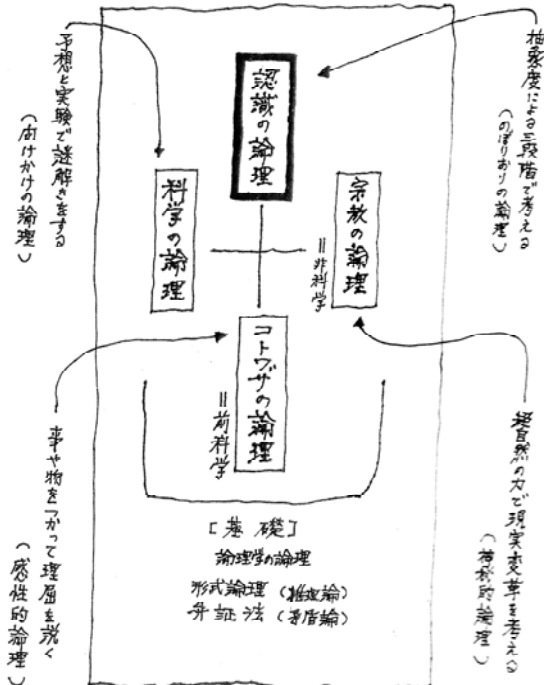
意識化するときに認識論が胎動する

論理的思考をまとめる

庄司 和晃

今回の庄司先生のレジュメは「論理的思考」と「マンダラ文化論と教育」「私の人生とは何か」「柳田さんと成城」の3本で

成城論理学の骨格 2013.10.11



あった。

まず「論理的思考」では、「論理とは筋道である。」と規定している。筋道は、言い方を変えれば「考え方」ということにもなるのだが、その全体構想に至るまでに「磁石の授業」からはじまって、そこから「上り」「下り」を見だし、「三段階連環理論」につながる道筋が見えてくる。その構成は12の章立てで組まれているが、科学の授業から転じて科学を相対化し「非科学」を取り込むことによって、その流れが宗教に転じていく様がよく分かるのである。

壮観なのは、三段階の構成を30以上も並べて紹介している No.8 のレジュメである。それは、**感じる**—**思う**—**考える** や **素材**—**過渡**—**本格**、**感覚**—**表象**—**概念**などの三段階の認識の流れが見事に列挙される。

それは、日常何気ない思考の動きが三つの段階に整理されること、またその思考を強く意識することで、認識が深まっていくことを理解することができるといえる。

「マンダラ文化と教育」は、認識を図表化することに注目した論考である。庄司先生は、よく認識に当たって絵を描くことを推奨するが、それは中間段階を深める上で

重要な手法であった。密教のマンダラがそれに当たるのだが、様々なマンダラ手法を紹介する中で長谷川孝さんの「学校教育の主人公三相図」や、川喜田二郎さんの自作を山田学さんが紹介した「KJ法の使命に照らして見た問題点と展望」などがあり興味深いものであった。

「私の人生とは何か」は、三段階論文作りの一つであるが、看護学校の生徒に「私の人生とは何か」を問うたものでその実験記録が紹介されている。ここに私という言葉を入れた点がミソで、多くの作品はそれぞれ自分に引き寄せた興味深いものになっている。

「私の人生は行き当たりばったりである。」とか「たとえとギャンブルのようだ」といった認識は今まで生きてきた足跡を振り返り今後の展望を託すことにもなっているんだなあと感じた。

「柳田さんと成城」は、民研報告第25号に寄稿したものだが、柳田が成城に書齋を構えた昭和2年からの成城学園における柳田国男の講演や講話を一覧表にして紹介されている。

柳田が成城に転居したのは昭和2年のこと。それから35年間にわたって柳田国男は成城学園に関わり、主に教育について、40回近い講演や講話を行っていることが分かる貴重な資料である。

創作 仏像 その2

篠原 賢明

前回に引き続き千手観音のイラストを使った篠原さんの教育実験の紹介である。

今回の授業は、「自分が千手観音だったら千本の手でどんなことをしたいか」そして、「千個の眼で何が見えるか」というテ

ーマであった。

千手観音のプロフィールを一通りした後早速子供達は、千手観音になってしてあげたいことを想像する。

- ・おふろをあらいたい。
- ・大工さんのはしごを押さえてあげる。
- ・おじいちゃんとおばあちゃん車を洗いたい。 …

人のために何かをする、というのが圧倒的に多いが、篠原さん自身がほんとうに子供達がそう思ったのか、と考えたという。1年生はもっとごちゃごちゃしているのでそこが本音かどうか、という指摘があったが、一つの授業の流れはできているということも見えてきているだろう。庄司さんは、篠原流が完成しつつあるといわれたが、提示の斬新さに加え、意気投合した子供達との絶妙な関係が垣間見えるともいえる。

篠原さんの実践記録には、「宗教教育への道」という言葉が銘打ってある。このことについては、全面研としてはきちんと感がえてみる必要があるだろう。

教育基本法では、特定の宗教教育は御法度になっている。しかし、しめ縄やお守りなど世の中には、宗教に関わる風景がおびただしくみられるのも事実だ。この整合性をどうするか。

一つは、科学に対する非科学の分野のものとしてくることが大切なのだ。科学に限界があることはすでに周知の通りである。宗教はそこにまた存在感がある。

そうした宗教の不思議さ、神秘さなどを心ある人が語ればいいのであって、文科省がやっているようなまわりくどいとらえ方をする必要はない、ということが庄司さんから語られた。科学をつくったのも人間で、その科学の奥底に哲学があり、それはまた

宗教と隣り合ったものともいえないだろうか。

篠原さんの研究は50年後に役に立つ！という庄司さんの言葉は、我々が未来を指向し、全面研を標榜するにおいて記憶にとどめておきたいことばだ。

沢柳政太郎 異聞

山田 学さんは、当日庄司先生が会に来る前に成城学園の門の前にたたずむ沢柳政太郎の銅像に深く会釈をしているのを見たという。このいう心持ちは、我々の研究の精神性の深部に横たわるもののように思う。

武田さんからも沢柳研究の出版について紹介があった。かつて富士銀行に勤めていた沢柳さんの教え子がまとめたものだそうで、出版セレモニーには財界の著名人もみえたという。

庄司先生からも、沢柳政太郎のほんとうの評価はまだ定まっていない、研究はしつくされていないとのことであった。6・3・3・4制の学制の構想が沢柳から出されたという話もあり、興味が尽きない。

中学生のものの見方考え方

徳永 忠雄

私の学級通信「ガブ」の紹介。(中学校1年生)

月に2回程度発行している学級通信だが、今回(10月25日号)は、「学校は何のためにあるのか」がテーマ。

具体的には、学校は「ものの見方・考え

方」をつくる場所と子供達とのやりとりの中から定義して、一人一人のものの見方・考え方を探った。そこで、毎日の生活の中で、自分で決めているルールを紹介する特集を行った号である。例えば次のような例がある。

- ・ゲームセンターでは300円以上使わない。
- ・先に面倒くさいことを済ませてしまう。
- ・学校での出来事は必ず親に話す。
- ・楽器を吹く前に必ず息を入れる。
- ・イライラしたら物にあたらず、植物と話す。

等々が紹介された。子供達は、自分のものと人のものを比べながら自分なりの認識を深めていく。中学生は、どうしてもオリジナリティを出すことを嫌がる。しかし実は一人一人が違うんだということを感じさせることも大切なのであると思う。

当日の会では、武田さんから「何でも自由にさせてはいけない」というコメントもあったが、一人一人の生き方を相対化して見つめ直す場であると説明した。

全面教育学研究会年報 原稿募集

今年度もゴールに近づき「年報」発行の時期になりました。

締め切りは**2月末日**です。

原稿は向井さんに直接送って下さい。
枚数は10枚程度を基本とします。

次回研究会は、4月を予定しています。もし不都合があったら早めにお知らせ下さい。詳細は、はがきで再度お知らせいたします。内容は、年報の合評です。

編集：徳永忠雄

序 柳田国男の論理

…柳田の学問には体系があるかないか、ということが時々話題になることがあります。ある人は体系がないといい、またある人は立派に体系が存在しているといって賛辞を送っております。この問題は、体系とは何か・体系があるとどうのご利やくが期待しうるのか・体系の有無と課題解決への影響、等の議論が必要になりますが、結論的に、私は、柳田の学問には、自然体系はあるが、認識論的体系はない、というふうに把握しております。自覚的に認識論的なおさえがないから恣意的・その場主義・気分的な面が色こくつきまとっていると思っております。気分的であることは、時によって鋭い洞察にもなりえますからある時点内ですばらしい働きをします。また、自然的体系にしても目に見えるようなイメージの範囲内では、かなり有効性と実践力をもっております。しかし目に見えない面やイメージの描けない面までも含めて秩序だてようとしたりすると破綻をきたすこととなります。児童語彙の分類立てや諺のとりあげ方などには、その限界がはっきりとあらわれれております。つまり、柳田の自然的体系はあそこまでが精いっぱい、それ以上の地点にまで歩を進めることはできないのであります。とはいつても、認識的なつかみどりの芽、あるいは認識論的な体系への志向は、素朴な形で著作の各所に姿を見せております。それを読み取って意識的にすくい上げ、認識の論理でもって体系化し、実践への適用を考えていくのは、後に引き継ぐ者のつとめだと思っております。

また、時には、柳田の学問は科学的なのか文学的なのか、ということが問題になることがあります。そして、後者に近寄りすぎているという人が多いようです。私もそうだと思っております。たとえば、柳田に特有の語彙や表現の意味するところを適確におさえてみようと思うと、種々なる言い回しがあつて、とまどうことがしばしばであります。定義、概念、法則、論理というような面からせまっていくと、なかなかその網に引っかからないのであります。捉えたと思っていると、他の所では否定しているような口ぶりがあつて、困惑することがたびたびあります。これも、反面からみれば積極面もあつて、豊かさの表示ともいえるのです。いわば未分化的な豊かさなのであります。混在的な豊かさといつてもよいでしょう。従つて、こちらがある予測や仮説をもつて問いかけながら著作等に接していかないと、その姿をあらわしてはくれないのであります。柳田への対し方には、ある面で、こういう主体性が要求されるのであります。私などは、その点でずいぶんまわり道をしてきました。本書の半分近くは、柳田に振り回された記録でもあります。それも急がばまわれということがありますから、ある面では得をしていることもありましよう。が、いつかは脱却しないと、ありじごくの巣穴にはまりこんだような恰好になってしまいます。これは、よそごとではなく、自戒の念の告白でもあります。

『柳田国男と教育 民間教育学序説』(1980 評論社)